

ろう者・難聴者等への新たなまなざし（2）

ーギャローデット大学にみるろう者観ー

原 順 子

（平成18年3月31日 提出）

アメリカにはアメリカ手話を第一言語として使用し、独自のろう文化をもつ、（大文字Dで始まる Deaf と表記する）、ろう者の存在が認知されているが、それはワシントンD.C.にあるギャローデット大学という、世界中のろう者や難聴者が注目する世界的にもめずらしいろう者・難聴者のための総合大学が中核的な役割を担っていると考えられる。本稿ではギャローデット大学の教育理念・使命や歴史から、アメリカのろう者社会との関連を考察した。またギャローデット大学は、1988年にDPN運動「ろう者の学長を、今」と呼ぶ、ろう者の公民権運動ともいえる大きなムーブメントが起こっているが、この運動がろう者パワーを結集し、その後のアメリカ障害者法（ADA）成立にも影響を与え、また Deaf という新しいろう者観にも多大な影響をもたらしたことを考察した。

キーワード：ろう者観、Deaf、ろう文化、ギャローデット大学

1、はじめに

ギャローデット大学はアメリカの首都ワシントンD.C.の北東部にある、1864年に設立された140年におよぶ伝統ある大学であり、世界で唯一¹⁾のろう者と難聴者²⁾のための総合大学である。世界中のろう者から注目されている存在であるが、わが国においてはろう者やろう教育関係者には知名度は高いが、社会福祉分野では詳しく知られてはおらず、名称は知っていても大学の具体的なカリキュラムや歴史、アメリカにおけるろう者社会での役割や貢献度は周知されていない。

わが国では、1995年に「ろう文化宣言」が出された後、アメリカのろう文化の紹介や研究が数多くみられるが³⁾、それらの文献からもわかるように、アメリカでは1980年代にデフ・コミュニティやろう文化に関する文献が発表され、1990年代以降はろう者が文化的マイノリティとして認知され

ようになり、ろう者観に大きな変化がみられるが、その要としてギャローデット大学の存在が大きいと筆者は考える。

本稿では、ギャローデット大学の概要、教育理念・使命、歴史を紹介し、アメリカのデフ・コミュニティやろう文化の社会的認知に至る経過や役割をギャローデット大学を通じて考察することで、アメリカにおけるろう者への新しいまなざしをみていくこととする⁴⁾。

2、ギャローデット大学について

2-1 概要

ギャローデット大学では、修士・博士課程をもつ大学院は聴者も入学可能であるが、学部は新入生の5%の聴者しか入学が認められておらず、原則はろう者・難聴者を対象とする大学である。講義は全てアメリカ手話（American Sign Lan-

原 順 子

guage : A S L) が使用されており、2003年の資料によると、秋学期の登録学生数は、学部1236人、院生506人、手話・専門研究生70人で、留学生は総数の11%となっている。また同年の教員数は292人で、そのうちの約40%はろう者・難聴者の教員である。学長は後述する「ろう者の学長を今=D P N運動」で選出されたろう者である Jordan, I. King である。また大学教職員のみならず、図書館職員をはじめ、カフェテリアや売店の店員、ガードマン、清掃員などにもろう者が多く採用されており、大学の中に一つのデフ・コミュニティが形成されている。

ギャローデット大学は連邦政府の認可により設立されており、現在も大学予算の約70%が国の補助で運営されている。総合大学故に開講されている学科専攻は幅広く、大学院には、管理と監督学、カウンセリング、教育学、オージオロジー、言語学、手話通訳、体育レクリエーション、手話学、臨床心理学、学校心理学、ソーシャルワーク、言語病理学などの専攻課程、学部にはアメリカ手話学、障害学、コミュニケーション学といったギャローデット大学特有のスペシャルな科目もあるが、それ以外は総合大学らしく多様な科目が開講されており(資料1)、「ろう者・難聴者のための大学」と称される通り、世界中からこの特色ある大学にろう者・難聴者関係者が集まってきている。

2-2 教育理念・使命からみるろう者観

大学には独自の教育理念や使命をもち社会的使命を果たす役割をもつが、ギャローデット大学も無差別・平等を明確に謳った教育理念・使命を掲げている。「ギャローデット大学宣言」(資料2)は、ギャローデット大学発行のパンフレット類や出版物に必ず明記されており、過去における被差別的、被抑圧的当事者としての歴史から、全ての差別や偏見を消滅させるべしとの大学の使命感を

強く感じるものである。

「ギャローデット大学の使命」(資料3)は、大学院ソーシャルワーク専攻の学生便覧に記載されているものである。内容は、①アメリカ国内のろう者・難聴者だけでなく、世界中のろう者・難聴者のための責務を担い、当事者の権利擁護をおこなう。②講義だけでなく、あらゆる学生生活全てにおいて、手話と英語の読み書きの両方を使用し、キャンパスライフの全てにおいて完全参加を目指す。③ろう者・難聴者の生活の向上だけでなく、家族や友人、共に働く専門職者も含めたデフ・コミュニティへの芸術や科学において貢献すること。以上3点が骨子である。

以上の教育理念や使命からも、手話を使用する独自の文化をもつ大文字Dで始まる Deaf としてのろう者観がギャローデット大学において浸透しており、ギャローデット大学が一つのデフ・コミュニティを形成し、学内においてはマジョリティな存在であることがわかる。

手話には日本手話とシムコム(sim-com:同時的コミュニケーション)との関係のように、アメリカにおいてもA S Lと英語手話があるが、学内での公用語はアメリカ手話(A S L)であり、講義の全てがA S Lでおこなわれている。大学院生のA S L獲得能力調査結果(表1)によると、入学時のA S L使用者(native signer)は、ろう学生の50%、難聴学生の14%、健聴学生の3%で、全ての学生が入学時からA S Lをマスターできているわけではないが、「かなり上手」である学生はろう学生の43%、難聴学生の29%、健聴学生の44%という実態は、ギャローデット大学で学生生活を送るにはA S Lが必須であるため高い比率となっている。当然ながらろう学生は日頃からA S Lを使用している率が高いため、「下手」であると回答したろう学生は0%となっている。入学後の調査結果は、「下手」であるとの回答は全ての

ろう者・難聴者等への新たなまなざし（2）

（資料1）ギャローデット大学および大学院の専攻科目

学 部（専攻科目）	大学院（専攻と資格取得プログラム）
会計学	管理・監督学専攻
アメリカ手話学	特殊教育管理（博士号） 管理学（修士号）
生物学	指導監督スペシャリスト 管理リーダーシップ認定書
経営学	カウンセリング学専攻
化学	精神保健カウンセリング（修士号）
コミュニケーション学	学校カウンセリング（修士号）
コンピューター情報システム学	教育学専攻
コンピューター工学	ろう教育（博士号・修士号）
障害学	ろう教育スペシャリスト
経済学・財政学	教育財団・研究調査学専攻
教育学（幼児教育・初等教育・中等教育）	統合技術認定証、国際開発認定証
英語学	聴力・発音・言語学専攻
家族児童学	聴力学（博士号・臨床博士号）
フランス語	言語病理学（修士号）
政治学	言語学専攻 言語学（博士号・修士号）
歴史学	手話通訳学専攻
芸術学	手話通訳学（修士号）
数学	体育レクリエーション学専攻
哲学	レクリエーションサービス管理（修士号）
体育学	アメリカ手話・デフスタディ学専攻
心理学	デフスタディ（修士号）
レクリエーション・レジャー学	政治歴史学専攻 ろう歴史認定証
ソーシャルワーク	ソーシャルワーク学専攻
社会学	ソーシャルワーク（修士号）
スペイン語	心理学専攻
テレビ・写真・デジタルメディア	学校心理学（修士号・スペシャリスト）
演劇学	臨床心理学（博士号）

（資料2）ギャローデット大学宣言

ギャローデット大学は、機会均等雇用及び教育方針のもと、人種、肌の色、性別、国籍、宗教、年齢、聞こえの程度、障害、職歴の長さ、婚姻状況、容貌、性指向、家族の責務、大学入学試験、政治団体への加入、収入源、ビジネスや居住場所、妊娠、子持ち、他の不法な状況などにより差別しない。

（資料3）ギャローデット大学の使命

ギャローデット大学の使命は、アメリカのみならず世界中のろう者・難聴者の為の総合的、多目的高等教育をおこなうことである。学部と大学院教育だけでなく、初等・中等教育もおこなっている。大学は地域センターのネットワークや国際条約、公的サービス、権利擁護活動といった世界中のオーディエンスに対しても活動を広げている。ギャローデット大学はろう学生と難聴学生のための世界で唯一の総合大学である。教員、職員、学生間のコミュニケーションは、講義も講義以外の学生生活においても、手話と英語の読み書きの両方を使用する。その結果、学生はキャンパスライフの全てにおいて完全参加が可能となり、一般教養科目の総合教育を受講することが出来る。ギャローデット大学はろう者や難聴者の生活の向上を目的とする調査の実施や、ろう者や難聴者、家族、友人、共に働く専門職者へサービスをおこなうために知性を向上させる芸術や科学を提供している。

（大学院ソーシャルワーク専攻学生便覧より）

原 順 子

(表 1) A S L 獲得能力調査結果 (大学院生)

		ろう学生	難聴学生	健聴学生
入学時	A S L 使用者	50%	14%	3%
	かなり上手	43%	29%	44%
	まあまあ上手	7%	43%	28%
	下手	0%	14%	25%
	計	100%	100%	100%
入学後	A S L 使用者	57%	14%	3%
	かなり上手	43%	57%	81%
	まあまあ上手	0%	29%	16%
	下手	0%	0%	0%
	計	100%	100%	100%

(大学院パンフレットより)

学生において 0 % となっており、いかに A S L 使用頻度が高く、学内の公用語であり、ろう者の第一言語として使用されているキャンパスライフであるかがわかる。また入学に際し A S L の習得が未熟な学生に対しては、入学前に学習できるコース (文化と言語のゼミナール: C L C) がある。現在では手話は文法をもつ 1 つの言語として認められているが、言語は使用することにより熟達するものであるから、学生生活の中で A S L を使用することで徐々に手話力が向上していく実態がよくわかる。

以上のことから、ギャローデット大学は単にろう者・難聴者のための教育保障をおこなっているだけでなく、デフ・コミュニティやろう文化といったろう者自身に関する研究・教育を実践することにより、アメリカだけでなく世界中のろう者・難聴者の社会的地位、生活の向上のために大きな役割を担っており、各分野のリーダー的存在となる卒業生を多く輩出している、ろう者・難聴者にとって中核的な役割を担っている大学であることがわかる。

3、ギャローデット大学の歴史からみたらう者観 次に、ギャローデット大学設立当時の状況から

現代に至るまでの主要な歴史を概観することにより、アメリカにおけるろう者の歴史との関わりを考察する。

3-1 ギャローデット大学の歴史⁵⁾

大学の創始者であり初代学長でもある Gallaudet, Edward Miner の父である Gallaudet, Thomas Hopkins の貢献から、ギャローデット大学の歴史は始まっている。Gallaudet, T.H. は隣に住む有名な物理学者メイソン・コグスウェルの娘であるアリス・コグスウェルが聴覚障害者であったことから、ろう者の教育に関心をもち、1814年、ヨーロッパのろう教育事情を調査する為にまずイギリスに旅立った。イギリスではオーラリズム (oralism=口話主義) を実践する学校を運営していた Braidwood, Thomas と数ヶ月間交渉したが、Braidwood 家もアメリカでの開校を計画しており、使用権を買い取ることが必要と言われたため断念した結果、フランスに出向くことになった。フランスではイギリスのオーラリズムと違い、1775年にアベ・ド・レベ⁶⁾が手話で教育するろう学校を開校しており、この学校で教えるろう者である Clerc, Laurent と出会い、2人でアメリカに向かうこととなった。当時52日間かけての船旅の間、お互いの言語、すなわち手話と英語を教え合い、アメリカに着くまでにお互いが会得したという。この経過によりアメリカのろう教育は、口話教育ではなく手話教育がまず開始されることになったという歴史的所以となっている。

1817年に帰国した両名は、教師のほとんどが手話を自由に使うろう者である「アメリカ・ハートフォードろうあ施設」を開校した。最初の生徒の1人が隣家のアリス・コグスウェルであった。この学校の教育成果によりろう者の識字率が著しく上昇し、人道的な試みとしてアメリカ社会から大歓迎され、全米各地に同様の学校が開校されたと

ろう者・難聴者等への新たなまなざし（２）

いう。

1856年、著名なジャーナリストで政治家、慈善家でもある Kendall, Amos が、ろう児の福祉と教育に関心をもち、ワシントン D.C.の北東部に 2 エーカーの土地を寄付し、盲ろうあ児学校を設立した。この学校は議会で法人として認可を受けていたが、1864年連邦議会がろう児を教えるろう者教員養成を目的とする、ろう者にとって初の高等教育機関である「コロンビア盲ろうあ学校 Columbia Institution for the Deaf and Dump and the Blind」を開校した。初代学長には Gallaudet, T.H.の 8 番目の息子で末っ子の Gallaudet, E.M.が就任し、リンカーン大統領から大学としての学校認可を得ることができた。設立当初は 5 名の教員と 8 名の進学予備課程⁷⁾の学生を含む 13 名の学生でスタートしている。

1881年までに 100 エーカーの土地を取得し、その地域では初の室内プールも設備された。1887年には最初的女子学生 Agatha Tiegel が「試み」に入学を許可され、12のクラスで BA degree を取得した最初の女性となっている。

1894年、同窓会の要望により理事会は、設立者である Gallaudet, T.H.の栄誉を祝し、名称をギャローデット大学（正式には Gallaudet College）と変更した。1910年の火事で College Hall が消失したが、議会が修復の予算を組み、また Flower Hall と女子寮は 1918年に完成した。Edward Miner Gallaudet 図書館は 1930年に寄付が集められ、1956年に完成している。

「The Buff and Blue」という名の学生新聞が 1934年に発刊され、「Tower Clock」という名の主席者年鑑が 1941年に始まっている。「Arsenic and Old Lace」という大学プロダクションは、1942年ブロードウェイで同じ演目をしているプロからのリクエストに答え上演している。この頃には「有能な農場労働者を雇えない」という理由で、

1946年には学内にあった農場を売り払っている。

1950年には最初のアフリカ系アメリカ人の学生が入学している。1968年キャンパス内に軍隊が市民戦争以来 2 回目の駐在をした。1966年にはろう学校の中等部が設立され、また 1976年に新しく校舎を建て、小学校も建設している。1986年には当時のレーガン大統領が the Education of the Deaf Act にサインをし、College から Gallaudet University となった。

1988年には第 7 代学長として聴者の Zinser, Elizabeth が選ばれたことに学生たちが抗議した結果、Jordan, I King が最初のろう者の学長となった。この「ろう者の学長を、今」DPN 運動（後述）は国中のろう者は言うまでもなく、聴者からも注目され、ろう者がろう者としての市民権をもつことになる分水嶺ともいえるメルクマールとなっている。

3-2 ギャローデット大学とアメリカのろう者の歴史

以上がギャローデット大学の歴史であるが、次にギャローデット大学とアメリカにおけるろう者の歴史との関連を考察する。（主要な歴史的出来事を資料 5 にまとめた。）

アメリカ統計年鑑によると、ギャローデット大学が設立された当時、例えば 1870年には College の数は 563 校、1880年には 811 校あり、College そのものはアメリカ市民にとって希少価値ではなかったという（潮木 2004：145）。アメリカの人口は日本の約 2 倍であるが、その当時の日本の高等教育と比較してみても、はるかに高等教育が進んでいたことがわかる。その中で聴覚障害の学生だけを対象とする特色あるギャローデット大学が他大学と同様に早期に設立されるに至ったのは、アメリカにおけるろう者の社会的地位を向上させる基盤が存在していたと考えることができる。

原 順 子

(資料5) 年表：ギャローデット大学とろう者の歴史 (筆者作成)

1814年	Gallaudet, Thomas Hopkins がヨーロッパに旅立つ
1816年	Clerc, Laurent とともにアメリカに帰国
1817年	ハートフォードろうあ施設開校
1830年代初頭	ニューヨークろう学校 (New York School for the Deaf) が自然な手話 (Natural Sign) に堪能な教師を雇用し、今日のアメリカ手話 (ASL) による教育を開始している。
1864年	首都ワシントンに連邦議会がコロンビア盲ろうあ学校を開校 Gallaudet, Edward Miner がリンカーン大統領に認可を求め、大学となる。 (the National College for the Deaf and Dump)
1867年	クラークろうあ学校設立 (口話) 初代教員の1人がアレクサンダー・グラハム・ベル
1876年	ベルが電話で最初の特許を獲得
1880年	ミラノで国際ろう教育者会議開催 口話の絶対性が確立 ＜1970年代に至るまでの約90年間、口話がアメリカのろう者の公式言語となる＞
1887年	条件付で女子学生の入学が許可される
1889年	同窓会が設立される
1892年	最初的女子学生が卒業する
1894年	ギャローデット大学 (College) と名称変更
1895年	最初的女子教員が採用される
1901年	最初の補聴器 (radio aid) が登場
1916～1920年	ろう女性がいくつかのろう団体の代表となる
1921年	Hanson が真空管式補聴器の特許を取得
1950年	補聴器が入手可能となる。トランジスター型補聴器登場
1953年	最初のアフリカ系アメリカ人が入学する 最初の女性アフリカ系アメリカ人が入学する
1960年	言語学者 Stokoe, W. (ギャローデット大学教員) 手話の研究論文発表
1964年	公民権法
1965年	言語学者 Stokoe, W. ら ASL の辞書を発行 (手話に関するマニュアル発行は約50年ぶり)
1965年	ロチェスターろう工科大学が設立される
1966年	キュー・スピーチが発明される
1966年	最初のアフリカ系アメリカ人の教員を雇用する
1967年	<i>Journal of American Deafness and Rehabilitation Association : JADRA</i> 『全米聴覚障害・リハビリテーション協会ジャーナル』発刊
1970年代	トータル・コミュニケーションが発案される
1970年	言語学者はアメリカ手話を研究対象とするようになる
1971年	ろうの女性が始めて Ph.D を取得 (Wayne State University)
1971年	テレビの料理番組「フランスのシェフ」で初めて聴覚障害者用の字幕放送が流れる。
1972年	Woodward J. が、大文字 D で始まる Deaf が手話を使用するろう文化、デフ・コミュニティをもつ文化的アイデンティティ者と紹介
1973年	A B C 「ワールド・ニュース・トゥナイト」ニュース番組で初めて字幕放送が始まる。
1981年	Jack Gannon が <i>Deaf Heritage</i> (デフ・コミュニティに関する最初の書物) を出版
1984年	最初の人工内耳埋込手術おこなわれる
1986年	ギャローデット大学が University となる
1988年	女優の Marlee Matlin がオスカー受賞。Julianna Fjeld がエミー賞を受賞。 ギャローデット大学 DPN 運動
1990年	Lane, H. が、医学モデルに対する文化モデルを提唱する論文を発表
〃 7月	A D A (アメリカ障害者法) 制定

(太字・・・ギャローデット大学関係)

ろう者・難聴者等への新たなまなざし（２）

またギャローデット大学創始者が、フランスより手話教育法を持ち帰ったことで、アメリカでは手話教育が実施されており、世界的に口話主義が台頭することになる1880年のミラノ会議により、アメリカにおいても口話教育が盛んとなっていく時期も、ギャローデット大学では手話が第一言語として当たり前使用され、特別な社会を形成していた。1940年代末にギャローデット大学の学生であった Bragg, B. (ろう者の俳優) が、当時の大学内の様子を次のように描写している。

「世界広しといえども、ギャローデット大学ほど聾者（注：原文のまま）が充実した社会生活を送れるところはほかにない。……略……聾者たちが朝から晩まで一緒に暮らし、聾者が多数派、聴者がアウトサイダーという環境で生活する類まれな楽しみを共有するのだ。大学では、聾者独自の言葉である手話が主要言語であり、聴者がこの共同体に受け入れてもらうためには、手話の知識を求められる。大学で学生たちは、多年にわたる孤独の埋め合わせをし、人間の正常な経験というのをせさせと蓄えるかのように、豊かな社会生活を満喫し、それから聴者の世界へ出て行って、アウトサイダーになるのである。」(Bragg1989＝関1995：94)

当時の学生数が250名という小規模（前掲：127）だったことから、ギャローデット大学に入学できる学生は学力が高いだけでなく、裕福な家庭の子どもであり、ろう者のエリート養成の場であったことがわかる。しかし、卒業後の職業選択の幅は狭く、ろう学校の教員になるのが優秀な学生にとって唯一の開かれた道であったようである。

ギャローデット大学は現在は総合大学であるが、創立当初はろう児を教えるろう者の教員養成を目的としてスタートしているが、ろう者自らが教員となる発想は、日本においては定着しておらず、未だにろう者教員の数は少ない。ギャローデット

大学出身のろう学校教師の調査をジェンセマとコルベットが1980年に実施した報告を植村英晴が紹介している（植村2001：102）が、これは1978年に全米のろう学校教師4887人を調査したもので、ギャローデット大学出身者が598名（学部卒388名、大学院修了者210名）おり、教師全体の中でろう者の教師が14%いる中で（そのうちの12%がギャローデット大学出身者）、ほとんどがギャローデット大学卒業者であることがわかる。

その後、聴者社会での社会的地位は高くはないものの、ギャローデット大学卒業生が徐々にアメリカ各地のデフ・コミュニティの中心的存在になっていき、またろう者関係の全米組織においても代表者や中心的役割を担うようになっていくのである。例えば、卒業生の中には38年間という長期にわたり、連邦政府の聴覚障害者施策部門の責任者としてさまざまな企画や立案に携わった Williams, B.R.、教育省の次官補を勤め、その後ロチェスター工科大学学長になった Davila, R.、障害者運動のリーダーとして活躍した Bowe, F.などが、デフ・コミュニティの中でリーダーとしての役割を担い活躍している（植村2001：99）。他には、前述の自伝を書いたろう者の俳優であり、NTD（全米ろう者劇団）に多大な貢献をした Bragg, B.、妻の Padden C.とともにろう文化の研究者であり、カリフォルニア大学サンディエゴ校の教員である Humphries T.の名前などを挙げることができる。

またギャローデット大学の教員の中にも著名な研究者が登場し、聴者社会でのろう者の認知を高める役割を担っていく。1960年には Stokoe, W. C.が、「手話は文法や体系をもつ1つの言語である。」という手話に関する画期的な学術論文を発表し、手話は手真似として蔑視されるものではなく、一つの言語と認識されるという従前とは違った見識を打ち立て、後の新しいろう者観の誕生へ

原 順 子

貢献することとなった。Stokoe は手話を「より小さい単位、つまり手型、動き、身体に対する手の向きなどで構成されたものとして分析できるのではないかと提案し、その小さい単位はある限られた方法で組み合わせられており、音声言語が音素と呼ばれるものの連続体で構成され、規則に従った構造で配置されているのと同じである。」(Pad den C. & Humphries T.1988=森 莊也他2003: 146~147) と説明し、アメリカ手話を英語より劣ったものと看做していた人たちに衝撃を与えたのである。その5年後、初めての『アメリカ手話辞典』を刊行しているが、当時は同僚の教員たちからも認められなかったという(前掲書:148)。しかし、徐々に学問的価値が認められ、Padden C.は、①言語学の原則に基づいて手話を記述したこと ②辞典の中にアメリカ手話を用いているろう者の「社会的」「文化的」特性を述べている点が独創的であると評価している。

1960年代は黒人の公民権運動が盛んな頃であるが、ろう者の場合もStokoeの手話研究に始まり、1972年にはWoodwardが大文字Dで始まるDeafの存在をアピールし、ろう文化やデフ・コミュニティに関する論文を発表し、他の障害種別、例えば重度身体障害者の自立生活運動とともに、新しい障害者観・ろう者観を生み出していくことになる。

アメリカにおけるリハビリテーション関係職種 のろう者への援助観を考察した奥田(2002)によると、1970年代はろう者はリハビリテーションの対象者であったが、1980年代以降Deafムーブメントが急速に広がっていった結果、ろう者=障害者というカテゴリーを超えて、デフ・コミュニティの社会的認知に至ったと指摘している。障害学の医学モデルに基づくろう者観から、徐々に文化モデルのろう者観へと転換していくのである。

その転換の加速度を高める契機になるのが、次

に述べるギャローデット大学のDPN運動である。

4、DPN運動からみたらろう者観

4-1 DPN運動の経過

DPN運動とは、1988年3月に起きた「ろう者の学長を、今」“Deaf President Now”のスローガンを掲げた学生による抗議運動の結果、ろう者の学長が選出された運動のことである。デフ・コミュニティだけでなく、アメリカ社会全体すなわち聴者社会からも関心をもたれ、以後一連のろう者の運動を「DPNムーブメント」とも呼ばれるようになった。以下、DPN運動の経過を説明する⁸⁾。

事の発端は、1987年8月に6代目学長のLee, Jerry C.(聴者)が12月に辞職すると発表後、ろう者の学長を求める学生たちが集結したことが始まりである。開校以来124年間に選出された6人の学長は全て聴者であり、Leeが選ばれた1984年には、ろう者の学長選出の是非について少し話題になったが、ろう者の学長が選ばれたことは一度もなかった。ろう者・難聴者のための総合大学と謳っているにもかかわらず、またろう者を一般社会に輩出することを大学が誇りながらも、大学運営に関してはろう者にまかせないと学生たちは怒り、「良心はあっても真の理解がない学校側の態度は健常者のパターンリズムを反映している。」(Shapiro1993=秋山1999:116)と抗議したのである。

翌年の1988年2月に6人の卒業生が集まり、学長選出委員会の候補者リストについて議論が集中し、キャンパス内で大集会を開催することを話し合った。当時、アメリカ在住の聴覚障害者2200万人のうち、ろう者は約10%といわれており、ギャローデット大学にはろう者以外に補聴器装用により聞こえる難聴者も多く在籍しているので、学長選出に向けての統一した見解をもって一致団結す

ろう者・難聴者等への新たなまなざし（2）

る方策を練った。

まず卒業生で地元の起業家ジョン・イエーが集会を呼びかけるチラシを作成したが、その内容は、「1842年、ローマ・カトリック教徒がノートル・ダム大学学長（訳注：カトリックの大学）になり、1875年、女性がウェルズリー大学学長（訳注：名門女子大学）になった。1886年にはユダヤ人がヤシバ大学学長（訳注：ユダヤ教徒の大学）に、1926年には黒人がハーワード大学学長（訳注：黒人が多い大学）に就任した。1988年の今、ギャロドット大学の学長職は、ろう者が占めるべきではないでしょうか。」（Shapiro1993＝秋山1999：119）と、説得力をもった記述になっている。

3月1日には学生や卒業生のみならず教員も加わり、約1500人がキャンパス内で熱狂的な集会を催し、これがテレビでも放映された。20人の講演者の1人であるアレン・サスマン教授は、「今日のこの出来事は、歴史に残る。ろう者による全米初の公民権運動だ。」（Shapiro1993＝秋山1999：120）と発言し、学生たちの心を揺り動かし目覚めさせた。この日は理事会が次期学長の候補者として、ギャロドット大学文芸学部長 Jordan, I King（思春期に失聴）、ルイジアナ州全寮制ろう学校学長ハービー・コーソン（先天性ろう者）、北カロライナ大学グリーンズボロ校 Zinser, Elizabeth（聴者）の3人を決定していた。

6日、理事会が最終的に聴者の Zinser, E.を選出したため人々の怒りが爆発し、演説とたくさんの涙で抗議行動が活発に盛り上がっていった。抗議の一大団が「ろう者の学長を、今」と叫びながら、理事たちが新学長の決定を祝っていた町の中心地にあるメイフラワー・ホテルまでデモ行進した。

7日、学生たちはバリケードをつくり大学を占拠し、授業は全てキャンセルされ、学生、教職員の委員会が新学長に要求書を突きつけた。その内容は、①Zinser 決定を取り消し、ろう者の学長

を選考すること。②理事会長ジェーン・バセット・スピルマン（7年間理事であったが、いまだに手話ができないと抗議された。）は直ちに辞職し、新しい理事会の過半数をろう者にすること。③これらの要求が実行されても、学生や教職員への報復をしないこと。の3点であった。

8日、約9割の学生が授業をボイコットし、全米の注目を集めると同時に支援の輪も広がっていった。例えば、全米各地にいるろうの学生が抗議を支援する手紙を送って来たり、地元の事業体の中には品物を寄付するところも出てきた。例えば、リネン製造会社はデモなどに使う旗用にと40枚のシーツを寄付し、地元の弁護士事務所は無料で弁護活動を引き受けると申し出た。更に、学内には当時幸運なことに、年に2回開催されるTDDマラソンの為にTDD（ろう者用電話機）がたくさん設置されており、学生リーダーたちはこれらを利用して、全米の記者や人々に抗議のための寄付を頼んだのである。また約70人の手話通訳者が、ろう者と記者などの通訳ボランティアとして活動した。

学長に任命された Zinser は、9日にワシントンに到着し「私が事態の収拾に責任をもつ。」と宣言したが、学生たちは彼女を学内に入れないように、学内に入ろうとする人や車も全てチェックし、またヘリコプターでも着陸できないよう学生たちが地面に横たわり妨害する準備もしていた。結局、Zinser は学内に入れないので、一部の学生をホテルに呼び、学生の前で話したいと申し出たが、学長と認めていない人に学生の前で話して欲しくないと学生たちは拒否した。

学生たちは次に連邦議会に自分たちの主張もちこむという賢明な行動に及んだが、その理由はギャロドット大学は連邦政府の特別認可を受けた大学であり、1988年の予算全体の75%、6100万ドルが連邦議会の承認で得ていたため、運営は行

原 順 子

政や議会と密接な関係をもっていたからである。当時副大統領であったジョージ・ブッシュを含む何人もの政治家が、学生の主張を支持していたという。

また学生たちはマスコミも活用し、全国ネットのABCテレビで毎晩放映される人気報道番組「ナイトライン」に9日、学生代表ヒルブックとZinserが出演し討論をおこなった。Zinserは「いつか必ずろう者の学長が選ばれる。」といい、それに対してヒルブックは「この「いつか必ず」というのは、使い古されたレトリックだ。そんな言い訳を124年間聞き続けてきたのだ。」と反論した。この時初めて字幕放送が流れたということである。その後理事会はZinserの任命を承認したが、学生の抗議は続いており、当初Zinser支持であったJordanが支持を撤回した。

その夜、Zinserは辞意を表明し、翌朝の記者会見で「秩序を回復し、この学校が教育を継続する為には自分が辞職してろう者の学長を選ぶのが方策なのでしょう。」と、最後に手話で「あなたたちを愛している」と伝えた。記者会見後、約3000人の学生や支援者がキャンパスから首都ワシントンまで、「ろう者の学長を、今」「私たちは後退しない」と手話でデモ行進をした。抗議開始から一週間目の日曜日、理事会メンバー17人が新しい学長としてJordanを選考し、学生の要求に全て応じると決定した。新しい理事会長に学長選考委員会のろう者代表で、IBMのプログラム・マネジャーのフィリップ・ブラビンが選出され、以後、理事会の半分はろう者であることが義務付けられ、また抗議参加者には何の懲罰もなしと決定された。

4-2 DPN運動の成果

以上、DPN運動の流れを詳細に記したが、DPN運動はギャローデット大学のホームページに、

写真も含め詳細に一連の運動の流れがまとめられており、当時のブッシュ副大統領の学生支援の手紙まで見ることができる。15年後の2003年にはDPN運動を祝して記念行事も開催されている。この一連の運動はろう者の公民権運動の金字塔でもあり、ろう者のパワーが集結できた一大出来事なのである。

学生役員の1人であるブリジッタ・ボーンは、「私たちは聴こえる世界の抑圧から解放されたい。聴こえる世界に頼って生活したくない。自立した人間として生活したい。」と発言し、学生代表としてスポークスマンであったヒルブックも、「他人に頼らず、自分たちで生活を管理し、未来を築いていけるのだということを、今こそ人々に見せなければいけない。」と主張している(Shapiro1993=秋山1999:123)。

この抗議行動の最中、ろう教育やろう文化などの研究で著明なLane, H(客員教授)の講演が予定されていたがキャンセルされている。Laneは「現実の問題の方が大事である」と自分の授業がキャンセルされたことに何とも思わなかったという(Shapiro1993=秋山1999:124)が、当時のろう者関係者は、学生が熱中している抗議行動の意義を理解していたのである。このLane, Hは1990年に障害を欠陥とみる従来からの医学モデルに対し、ろう者を文化モデルで理解する論文を発表している(Lane, H. 1995)が、聴者社会に同化するのではなく、ろう者としてのアイデンティティをもつ存在となってきたこのDPN運動の流れが、Laneの説に影響を与えていると考察できる。

ギャローデット大学の学生たちは、聴こえないことを障害と捉えず、一つの独立した文化と考え、ユダヤ人、アイルランド人、ナバホ系インディアンであるのと同じ(Shapiro1993=秋山1999:131)であり、「Deaf」という表記は独立した文化集団

ろう者・難聴者等への新たなまなざし(2)

であることを意味する時に使い、英語とは違った複雑な体系のアメリカ手話を使い、独自の歴史や文化を所有しているのであり、deaf は聴力の状態を指す用語であるということが定着していったのである。「障害」は医学的な観点からの人間の状態をいい、聴力の欠如をこの「障害」として捉え、更正が必要な病理と考える人々が長い間ろう者を抑圧してきたことへの公民権運動がDPN運動なのである。

フットボール選手のジョン・リムニディスは、「耳が聞こえないことは障害ではない。むしろ文化である。手話は別の言語であって、私は耳が聞こえないことを誇りに思っている。もし万が一耳が聴こえるようになる薬があっても、決して飲まない。決して死ぬまで絶対飲まない。」と発言している(Shapiro1993=秋山1999:131~132)。

DPN運動が起こったこの時期は、カリフォルニアを中心に起こってきた重度身体障害者の自立生活運動の影響や、技術革新によりTDD(ろう者用電話機)が流通し始め、ろう者のコミュニケーション保障が進捗していったこと、以前はCODA(Children of Deaf Adult: 家族にろう者がいる聴児)の役割だった手話通訳が職業として確立するようになったこと、1988年頃には、全国ネットのテレビ局やケーブルテレビで、週に180時間の字幕放送が放映されるようになっていたこと、統合教育が進み、1985年頃には、ろうの学生の44%が公立の普通学校に、そして29%が全寮制のろう者のための学校に通学していたことなどが背景にあり、それらが学生たちのろう者としてのアイデンティティをもつことに良い影響をもたらしたのである(Shapiro1993=秋山1999:130)。また、医療の進歩による死亡率の低下や、1964~65年には風疹の流行があり、聴覚障害児が2倍に増加したという。この結果、ろう者の人口が増加し、ろう者のパワーに結びついたとShapiroは説明し

ている。1980年代というのはアメリカにおいて社会全体が変化し、人口増加や技術の進歩をもたらし、ろう者のマイノリティ意識、すなわち文化モデルのろう者観が定着していくことにつながっていった時代と考えられる。

DPN運動の2ヵ月後に、アメリカ障害者法(ADA)案が議会に提出され、その後、異例ともいえる短期間で議会通过している。全米障害者評議会(the National Council on the Handicapped)にいたレックス・フリーダンは、「ギャローデット大学で人々の意識がめざめなければ、このようなことは起きなかっただろう。」と回想している(Shapiro1993=秋山1999:116~117)。5章構成のADAの中で、第4章が聴覚障害者のコミュニケーション保障についての「電話通信(テレコミュニケーション)」⁹⁾であるが、DPN運動のろう者パワーが集結した結果と考えられる。

5. まとめ

以上、ギャローデット大学の概要、歴史的経過から、アメリカろう者社会との関連について考察をおこなった。ギャローデット大学の存在は、ろう者・難聴者にとってはアメリカでの中核的な存在であり、また留学生が多いことからグローバルに重要な役割を担っている存在であることがわかる。

アメリカにおいて大文字Dで始まるDeafという文化モデルのろう者観が定着するに至った要因として、①ろう者のための総合大学であるギャローデット大学の存在。②DPN運動が聴者にとっても、ろう者パワーを認識する契機となった。③Lane.Hを代表とするDeaf研究が盛んにおこなわれた。④アメリカは多文化共存社会であるため、ろう文化が受け入れやすい。といった点を挙げることができる。

わが国での1995年の「ろう文化宣言」が、

原 順 子

Woodward のいう大文字Dで始まる Deaf と同じ論説と捉えれば、アメリカに遅れること約20年、また Lane の文化モデルからは5年後に登場したということになる。今後わが国においてもD P N運動のようなろう者パワーのムーヴメントが将来起こりうるのかどうか、今後のろう者観の変遷を見据えていきたい。

注

- 1) アメリカにはギャロデット大学以外にろう者・難聴者が多数入学しているロチェスターろう工科大学、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校、サンホゼ校などがあり、またA D Aにより情報保障ならびにコミュニケーション保障が義務付けされているため、ギャロデット大学だけがろう者・難聴者ための大学ではない。しかし講義が全てA S Lで行われ、学生のほとんどがろう者・難聴者であるということで、唯一の大学と記した。日本には国立大学法人筑波技術大学（3年制の短期大学であったが、2005年10月より4年制大学となった）があるが専攻学科数は少なく（入学定員は50名）、ギャロデット大学のような総合大学ではない。
- 2) ギャロデット大学のホームページや印刷物には「for deaf and hard of hearing」と明記されている故、正確には「ろう者・難聴者」と記すべきであるが、本稿の文中ではアメリカ手話を使用し、ろう文化に価値をおく「Deaf」の意味合いで「ろう者」を使用している。
- 3) 現代思想編集部編（2003）『ろう文化』青土社、森 莊也（1999）『ろう文化と障害、障害者』石川 准、長瀬 修編『障害学への招待』明石書店など、他にも多数文献がある。
- 4) ギャロデット大学に関する文献は充実している上に、視覚的情報を必要とする学生の為に非常に充実したホームページを作成しており、筆者はそれらを参考にするとともに、2005年8月に訪問した際に入手した大学案内やパンフレットなども参考資料として、以下考察をおこなった。
- 5) ギャロデット大学の歴史に関してはShapiro1993＝秋山1999：132～150が詳しい。その他に大学院ソーシャルワーク専攻学生便覧、大学ホームページ内の歴史に関する部分を参考にした。ギャロデット大学ホームページは <http://www.gallaudet.edu/> である。また、人名は極力英語表記を試みたが、中にはカタカナ表記になっているものもある。
- 6) アベ・ド・レペは手話の発明者であるとい一般的に評されるがそれは誤解であり、手話はろう者のあいだで自然発生したもので、誰かが発明したものではない。
- 7) 新入生がすぐ1年生のクラスに入るには学力不足のことが多いために設けられている。（Bragg Bernard1989＝関1995：94）ギャロデット大学に入学するには、地域の教育委員会あるいは特殊学校の推薦を受け、高校を卒業しており、ギャロデット大学の入学試験に合格することが必要。Turkingtonによると、大抵1400名以上の生徒が受験し、半数が合格する。その内約70%の学生が入学前に進学予備課程に1年間学ぶことが求められているという（Turkington2000＝中野善達2002：115）。
- 8) D P N運動については（Shapiro1993＝秋山1999：115～132）が詳しい。また大学ホームページ内にD P N運動の詳細な情報に加え、写真や資料なども豊富に掲載されている。中には当時のジョージ・ブッシュ副大統領からの手紙もある。これらを参考にD P N運動の経過をまとめた。
- 9) A D Aは、第1章「雇用」、第2章「公共サービス」、第3章「民間事業体によって運営される公共性のある施設およびサービス」、第4章「電話通信（テレコミュニケーション）」、第5章雑則から構成さ

ろう者・難聴者等への新たなまなざし (2)

れている。

文献

- Bragg Bernard (1989) *Lessons in Laughter: The Autobiography of a Deaf Actor* バernaード・ブラッグ、関 弘、秋田忠昭訳1995『「笑い」のレッスンーある聾俳優の自伝』トバースプレス
- Dolnick E. (1993) *Deafness as Culture* The Atlantic Monthly September 1993
- ギャロデット大学 大学および大学院案内、ソーシャルワーク学部学生便覧
- ギャロデット大学ホームページ
<http://www.gallaudet.edu/>
- 現代思想編集部編 (2003)『ろう文化』青土社
- Lane H. (1995) *Constructions of Deafness* Disability & Society, Vol.10, No. 2
- 奥田啓子 (2002)「ろう者をめぐるソーシャルワーク実践の基礎的考察ーアメリカの専門誌にみる援助観の動向を中心としてー」『社会福祉学』第43巻第1号
- Padden C. & Humphries T. (1988) *Deaf in America: voices from a culture*.Cambridge, MA: Harvard University Press キャロル・パッデン、トム・ハンフリーズ、森 莊也、森 亜美訳 (2003)『ろう文化案内』晶文社
- Shapiro Joseph P. *NO PITY: People with Disabilities Forging a New Rights Movement* 1993 = ジェセフ・P・シャピロ、秋山愛子訳 (1999)「第3章 別の文化を祝福するろう者」『哀れみはいらないー全米障害者運動の軌跡』現代書館 p115～158
- Turkington Carol and Sussman E. Allen (2000) *The Encyclopedia of Deafness and Hearing Disorders 2nd Edition* (=中野善達監訳 (2002)『聾・聴覚障害百科事典』明石書店)
- 植村英晴 (2001)「第5章第1節アメリカ合衆国の手話通訳認定制度」『聴覚障害者福祉・教育と手話通訳』中央法規 p99～
- 潮木守一 (2004)『世界の大学危機』中公新書
- Wax M.Tovah (1995) *Deaf Community* Encyclopedia of Social Work 19th 679～684

